連載コラム

みずき野とその周辺の植物と昆虫

第１１回
春の野の草花

本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫
（11）春の野の草花

３月～４月はウメ、サクラ、モモ、モクレンなど木の花に目を奪われる季節ですが、地面に目を転じると、いろいろな野草の花も競い合って咲いていることに気付きます。今回は、３月～４月の野の草花について述べてみましょう。

（１）オオイヌノフグリとその仲間たち

オオイヌノフグリは越年草で、秋に種子が発芽し、初夏までに種子を作って枯れてしまいます。春先にもっとも目立つ野の花で、日当りのよい野原や土手に群生します。西南アジア原産の帰化植物で、明治時代の初年頃日本に入り、またたく間に全国に広がったようです。

オオイヌノフグリ
３月上旬
本町地区

犬ふぐり星のまたたく如くなり　　高浜虚子

俳句の季語として使われる「犬ふぐり」はオオイヌノフグリのことです。在来種にイヌノフグリという植物がありますが、その花はオオイヌノフグリの花より小さく、

淡いピンクで星になぞらえられるような花ではありません。イヌノフグリの方は、オオイヌノフグリに圧倒されて激減し、今は環境省により絶滅危惧種に指定されており、守谷市内では見たことがありません。

タチイヌノフグリも越年草で、みずき野周辺にごく普通に見られる植物です。ヨーロッパ原産の帰化植物で、明治初期に日本に入り、全国的に広がりました。地面を匍匐するオオイヌノフグリと異なり、茎が上方に伸びて高さは２０～３０センチになります。

タチイヌノフグリ
４月上旬
わが家の庭

フラサバソウは、数年前まで８丁目の道路沿いの植込みの中に見つかりましたが、最近は見られなくなりました。しかし守谷市内ではしばしば見かけます。花は小さく、うすいピンクで、また葉にはたくさんの毛が生えています。この植物もヨーロッパ原産の帰化植物で越年草。幕末に日本でこの植物を見つけて研究したフランス人のフランシェとサヴァティエの名をとって、フラサバソウと名付けられました。

フラサバソウ
３月下旬
８丁目

ムシクサは、日本を含む東アジアに原産する１年草。みずき野周辺にごく普通の植物で、春に小さな白い花をつけます。この植物の実にはゾウムシの一種ムシクサコバンゾウムシの幼虫が寄生することから、ムシクサとよばれます。

ムシクサ
４月上旬
わが家の庭

以上が３月～４月にみずき野周辺の春に見られるイヌノフグリの仲間ですが、イヌノフグリとは、実のかたちが犬の「ふぐり」に似ているという理由で付けられた名称です。可憐な花を咲かせる植物には失礼な名ですが、実を見るとなるほどと思わず笑いたくなります。

（２）ホトケノザとヒメオドリコソウ

ホトケノザもヒメオドリコソウもオドリコソウの仲間ですが、オドリコソウ自体はみずき野周辺には見当たりません。

ホトケノザは在来の越年草。秋にも咲きますが、春には群生して咲きます。花の下の葉を蓮台と見立てて「仏の座」と名付けられたのでしょう。春の七草の一つであるホトケノザは上記ホトケノザとは異なり、正式な和名をコオニタビラコというタンポポに似た植物です。

ホトケノザ
３月上旬
貝塚地区

ヒメオドリコソウはヨーロッパ原産の越年草、日本では明治２６年に発見され、現在は全国に普通に見られます。場所によって、花や葉の色に変異が見られます。

ヒメ
オドリコソウ
３月中旬
本町地区

（３）ハコベの仲間

ハコベは春の七草の一つです。ただし、単にハコベとよばれる植物には２種あって、それぞれにミドリハコベとコハコベという和名がついており、どちらも越年草です。ミドリハコベは在来種ですが、コハコベはヨーロッパ原産で大正期に日本に入ってきたものと考えられます。ミドリハコベは雄しべが８～１０本ありますが、コハコベは３～５本です。ミドリハコベは葉が大きくて明るい緑色、コハコベは葉が小さくて、やや黒ずんだ緑色です。

ミドリハコベ
４月上旬　７丁目

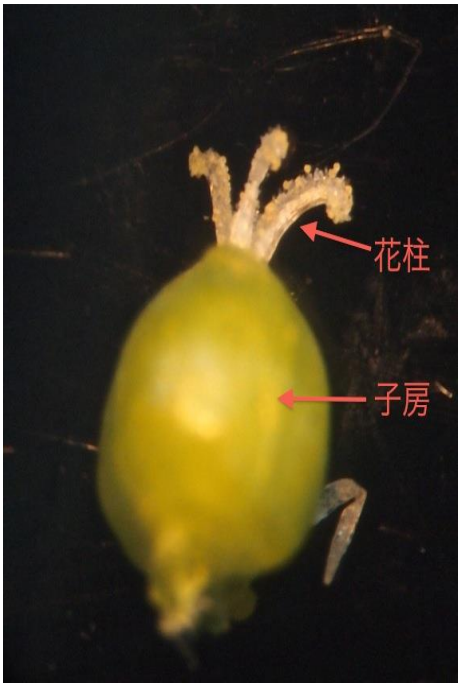
コハコベ
３月中旬　本町地区

ノミノフスマは在来の越年草で、畑地に普通のハコベの仲間です。ミドリハコベやコハコベの葉には葉柄がありますが、ノミノフスマの葉には葉柄がほとんどないので識別できます。ノミノフスマは「蚤の衾」という意味で、衾（ふすま）とは布などで作り、寝るとき身体をおおう夜具のこと（広辞苑）。小さな葉を蚤の衾にたとえたようです。

ノミノフスマ
４月下旬　貝塚地区

ウシハコベもみずき野周辺によく見かける在来のハコベです。ミドリハコベなどより目立って大きいので大抵は区別できますが、厳密には雌しべの花柱の数で識別します。ミドリハコベやコハコベの花柱は通常３本ですが、ウシハコベの花柱は５本です。

ウシハコベ
４月下旬　貝塚地区



注：雌しべは子房（将来果実になる部分）と花柱からなる雌の器官です。花柱は子房の上部についていて、花柱の先端を柱頭と言います。柱頭は花粉がつく場所です。柱頭についた花粉からは、花粉管という管が伸びだし、花柱の中を通って子房にたどりつきます。花粉管の先端から雄の核が放出され、子房の中の雌の核と合体し、種子がつくられます。

コハコベの雌しべの拡大図
花柱が３本あるところに注意
ウシハコベは花柱が５本ある

（４）オランダミミナグサとミミナグサ

オランダミミナグサはヨーロッパ原産の帰化植物で越年草。みずき野町内にも至る所に生えています。オランダミミナグサの勢いに圧倒されてか、在来種ミミナグサ（越年草）は激減しました。オランダミミナグサよりミミナグサのほうが少し遅れて咲きます。またミミナグサの方が花柄が長いので識別できます。

オランダミミナグサ
４月中旬　３丁目東斜面下

ミミナグサ
４月下旬　３丁目東斜面下

（５）ナズナ

ナズナは春の七草の一つで、もちろん在来種です。田畑や道ばたにごく普通の植物で、ナズナというよりペンペングサという方がなじみのある名です。実のかたちが三味線のばちに似ているからでしょう。花がきれいというわけでもないのに、人によく知られているのはあの素朴な風情からでしょうか。また七草の一つとしての春の味わいからでしょうか。

ナズナ
３月上旬　貝塚地区

ナズナ
３月下旬　貝塚地区

芭蕉や蕪村の句にもナズナが登場します。

よくみれば薺（なづな）花咲く垣ねかな

芭蕉（続虚栗集）

一とせに一度つまるる菜づなかな

芭蕉（泊船集）

妹（いも）が垣根さみせん草の花咲ぬ　　蕪村

蕪村の句について、安東次男の著書「与謝蕪村」には、「晩年の蕪村に小糸という年若い愛妓がいたことは、句や手紙の端々から知られる」とあり、この句の「妹」とは小糸のこと。蕪村６５歳の句で、その頃は蕪村と小糸の仲は事実上終わっていたのかも知れないと安東は推測しています（講談社学燈文庫）。ペンペングサを「さみせん草」としており、句の中に蕪村の小糸への断ち切れぬ思いが込められているように思います。

蕪村の著名な「北寿老仙をいたむ」は、蕪村よりずっと年上の友人「北寿老仙」すなわち俳人早見晋我（しんが）が亡くなって後、晋我を追悼する詩です。その冒頭の部分はつぎのように書かれています。

君あしたに去りぬゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる

君をおもふて岡のべに行きつ遊ぶ
おかのべ何ぞかくかなしき

蒲公（たんぽぽ）の黄に薺（なづな）の
しろう咲たる
見る人ぞなき　・・・・・

蕪村がそうであったように、晋我もタンポポやナズナのような、野の素朴な花を好んだのでしょうか。ある花が咲いているすがたを見て、亡き人を追慕する気持はよく理解できます。

2015 年 3 月

本吉　總男